

5-2 川端地区トレンチ調査

5-2・1 トレンチ調査の目的

1596年慶長近畿地震で鳴門市高島付近が隆起したという古地震の記録から、石橋（1989）は慶長近畿地震で中央構造線活断層系が活動した可能性を初めて指摘した。しかし、その根拠とした史料の時代認定に信頼性が欠けるといわれ（山本,1991）、慶長近畿地震と中央構造線活断層系の活動の関係は課題として残った。その後、神田断層と父尾断層でトレンチ調査が行われ、これらの断層は1596年慶長近畿地震で活動した可能性が高いといわれている（岡田,1992；岡田ほか,1993a；Tsutsumi and Okada,1996；岡田・堤,1997）。また、淡路島東部の断層も1596年慶長近畿地震で活動していることが明らかになっている（杉山,1998）。鳴門断層についてはこれまでトレンチ調査により活動履歴が把握されていない。鳴門断層は徳島市や鳴門市の人口密集地近隣に分布しており、都市防災上重要な断層である。最新活動時期や活動履歴を把握し、地震の危険度評価を行うことを目的として、鳴門断層を対象としてトレンチ調査を行った。

5-2・2 トレンチ調査位置決定の経緯

鳴門市大麻町から西側では、鳴門断層は各所で沖積扇状地を横切って分布しており、沖積扇状地上に低断層崖、撓曲崖などの断層変位地形が多く認められる。しかし、大きな河川で形成された沖積扇状地は粗粒な堆積物からなり、地層の変位や変形がわかりにくく、また、年代試料も少なく、トレンチ調査に適していない。これに対して、小河川の沖積扇状地堆積物は細粒な堆積物からなり、断層の変形・変位を把握しやすく、年代試料も多い。図5-2・1に示すように、川端地区は小河川の出口にあたり、トレンチ調査に適していると考え、本地区を選定した。

5-2・3 トレンチの規模

川端地区トレンチ調査位置図を図5-2・3に示す。また、図5-2・4に掘削形状を示す。トレンチの深さは5mで法面の勾配は45°とし、安全管理のため中間に小段を設けた。掘削土量は1,265m³である。巻末に工事数量を示す。

5-2・4 調査期間

表5-2・1にトレンチ調査の工程表を示す。平成10年6月中旬から7月にかけてミニトレンチを掘削した。ミニトレンチの結果から、引き続き本格的なトレンチを掘削することにしたが、土器等の遺物や遺跡が出現し、県教育委員会による発掘調査が行われることになった。8月から9月にかけて発掘調査が行われ、9月の下旬から本格的なトレンチを掘削した。10月下旬から11月にかけて観察を行い、平成11年1月に埋め戻した。

表 5 - 2 ・ 1 川端地区トレンチ調査工程表

工事名 川端地区地質調査工事

工 期 自 平成10年 月 日
至 平成11年 月 日

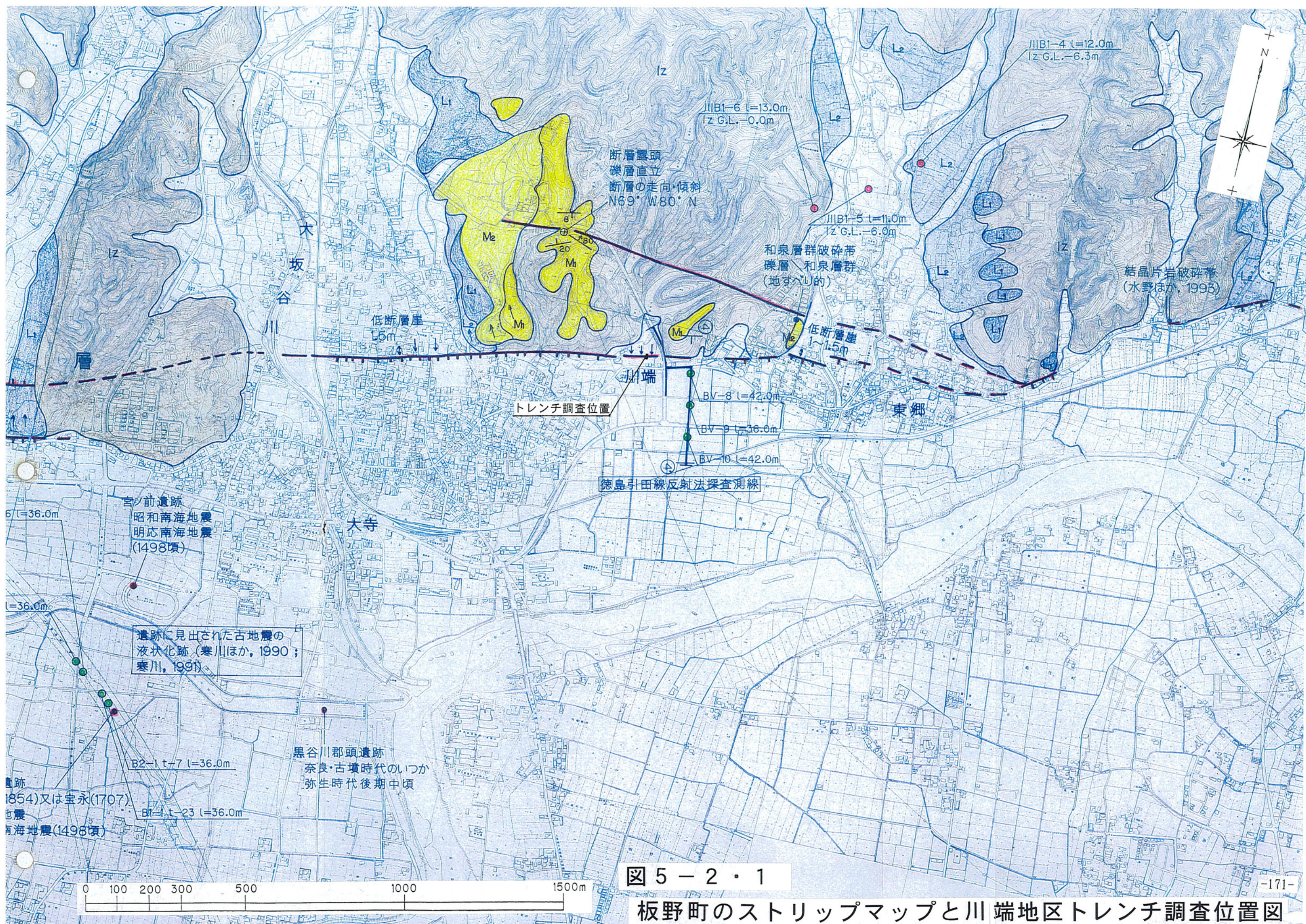
施 工

年 月	平 成 10 年							平 成 11 年		備 考
	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	
工 種										
準備工										
仮設工	進入路整備・水替え工									
土工	一 次 掘 削		二 次 掘 削				埋戻し			
共通仮設工	現場事務所・休憩所									
安全対策工	仮囲い・昇降路									
遺跡調査	徳島県教育委員会									
調査工										
跡片付け										

5 - 2 ・ 5 担当者

トレンチ調査の現場管理,壁面の観察,年代試料の採取等の担当者は次のとおりである。

担当者：応用地質株式会社 森野道夫,能見忠歳,竹野恵美,池田小織,市原 健,
林 浩幸



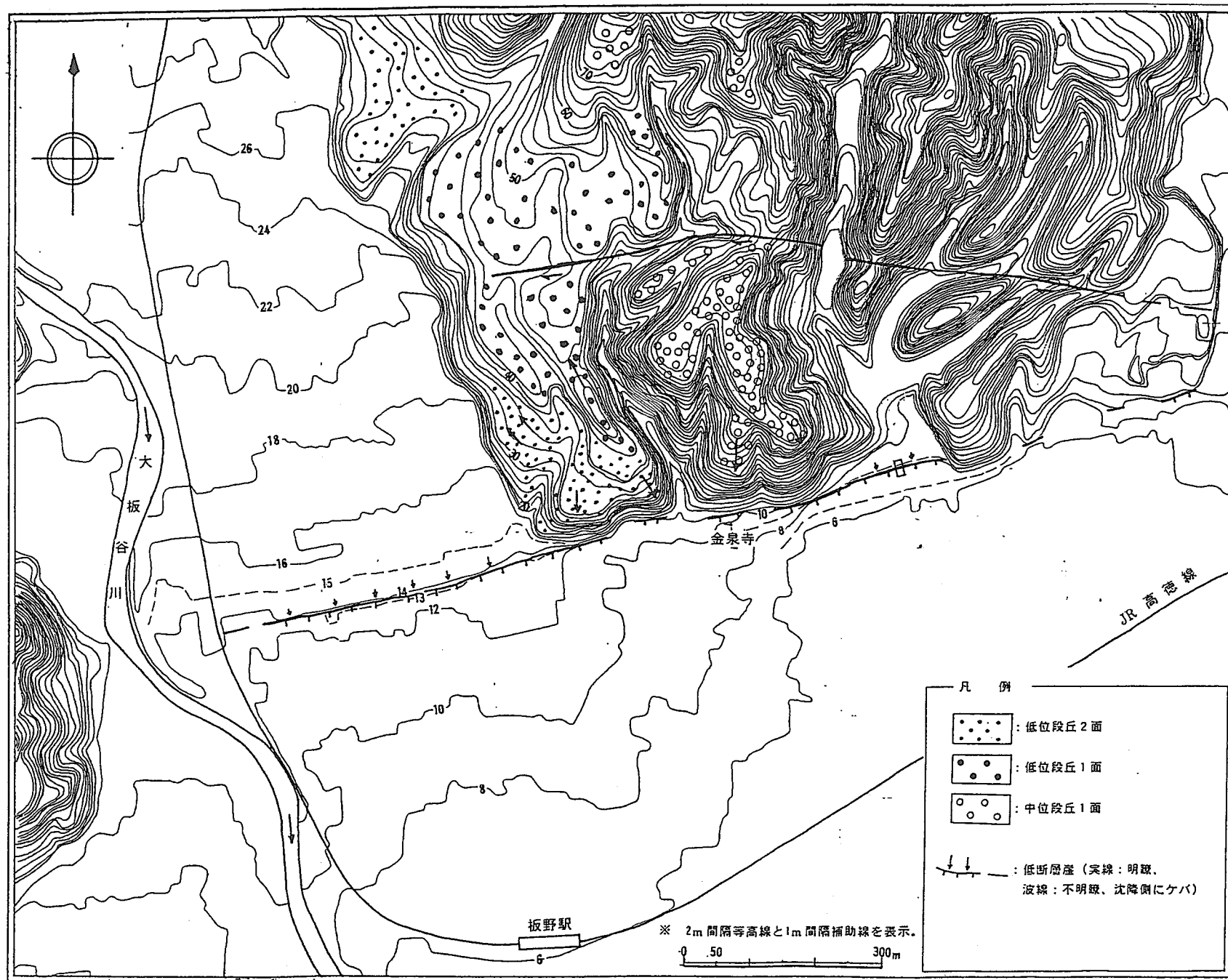


図 5 - 2 ・ 2 板野町詳細地形図

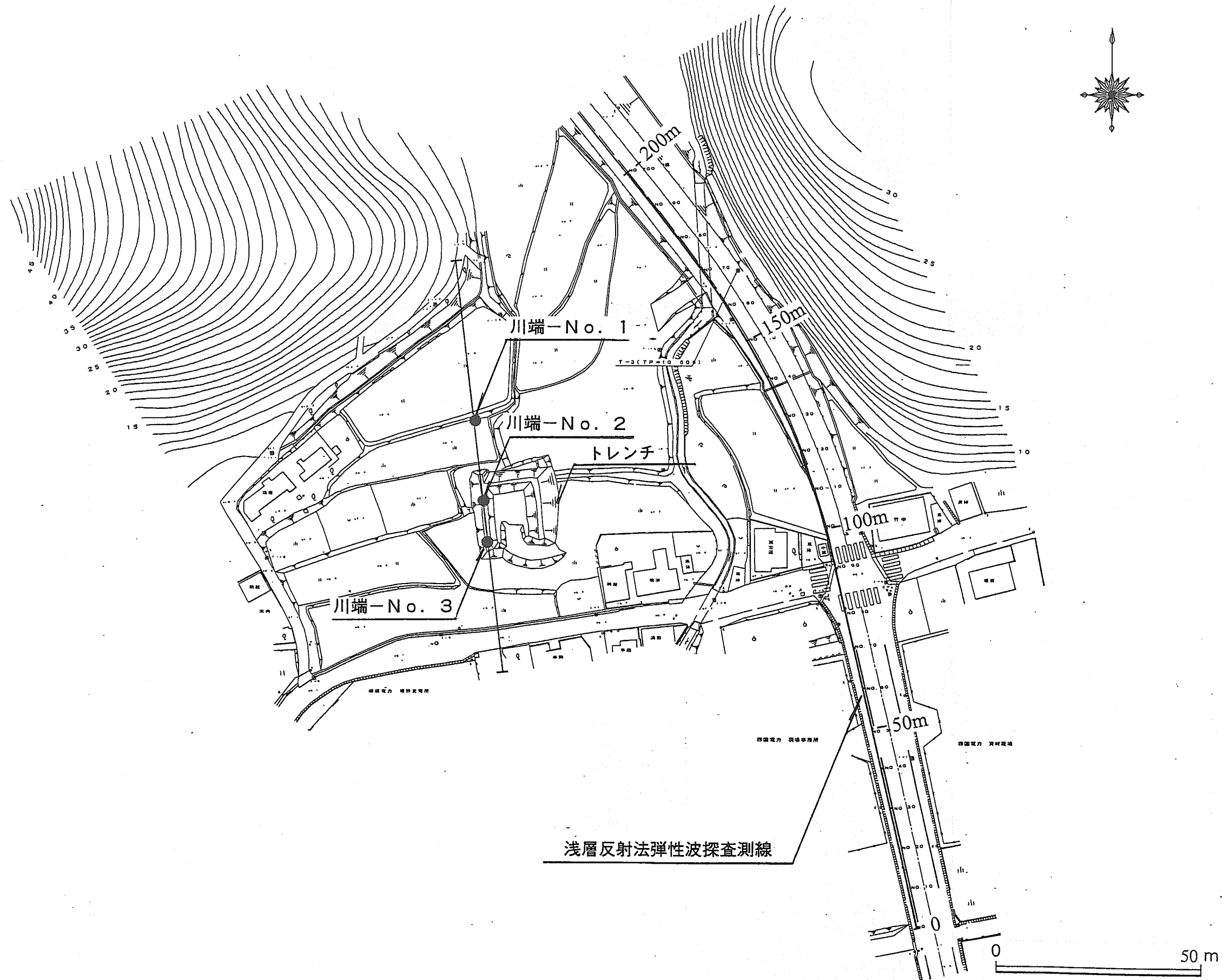
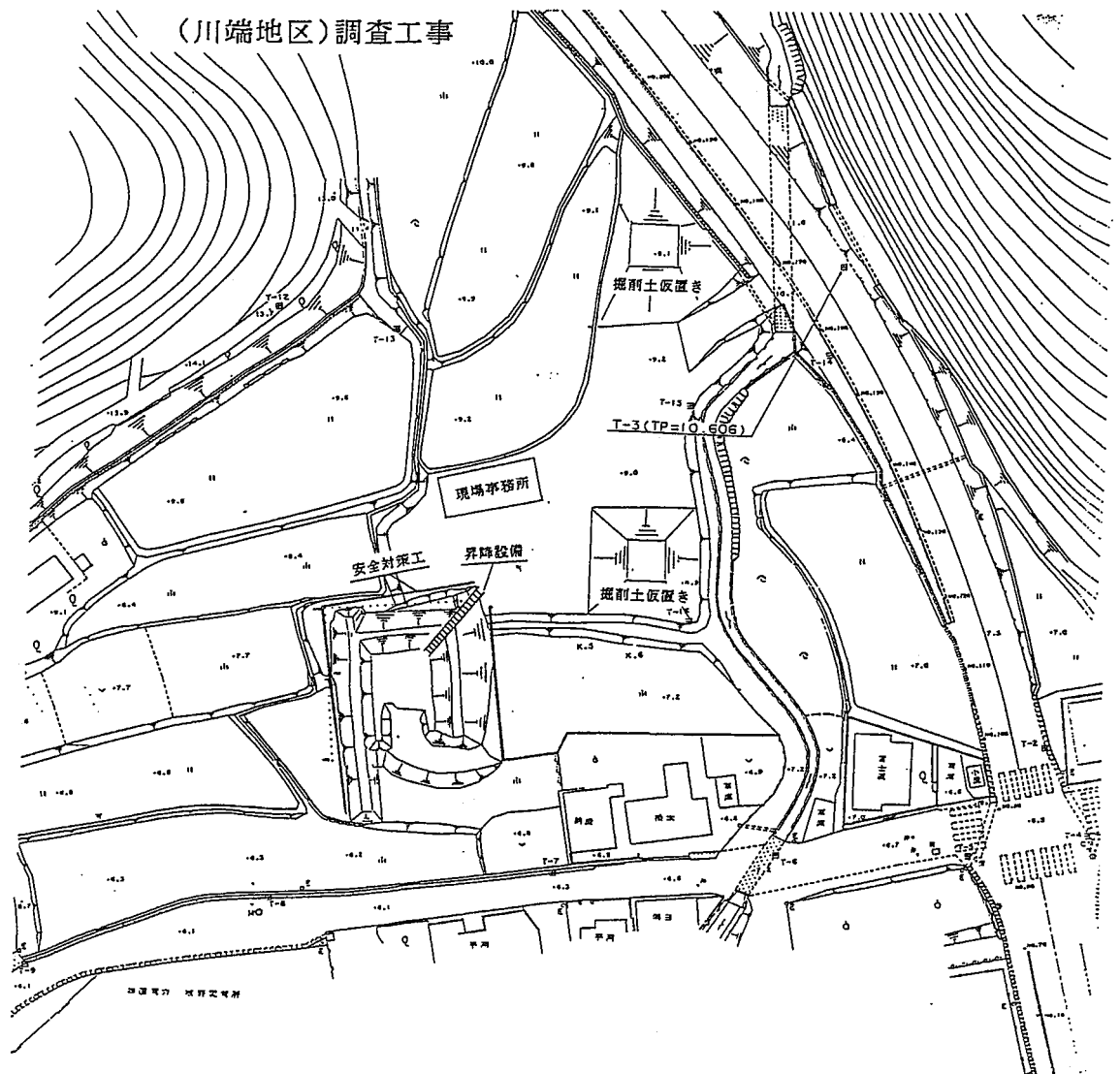


図 5 - 2 ・ 3 川端地区トレンチ調査位置図 1:1000



標準断面図

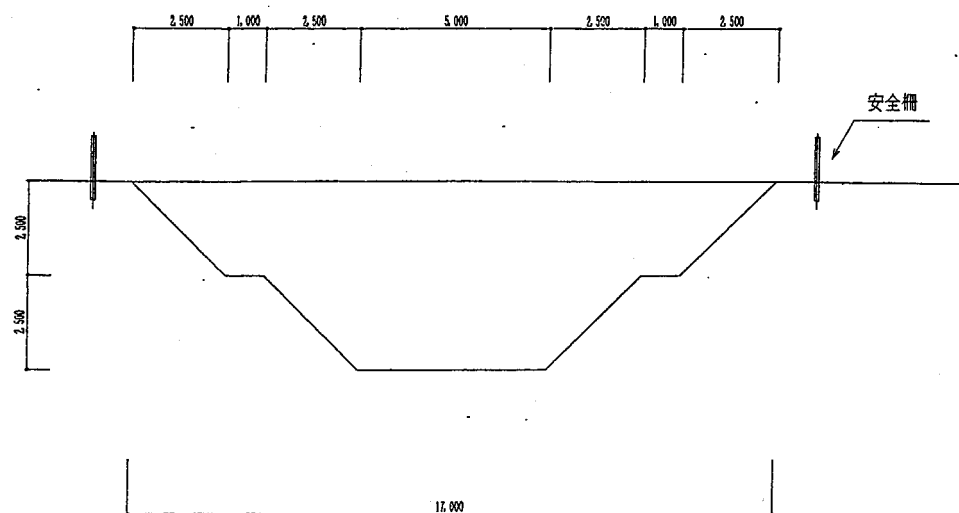


図 5 - 2 ・ 4 川端地区トレンチの掘削形状